

ぎぼし 清須越の擬宝珠

五条橋

石畳が敷きつめられている五条橋は、堀川のどの橋にも見られない風情が漂っている。

その五条橋は、名古屋の街の誕生と深い関わりをもっている。徳川家康は東海道の要諦として九男の義直を尾張の国に封じた。慶長15年(1610)、清須から名古屋へ、7万人ともいわれる人々が住居を移した。俗に清須越といわれる転地である。

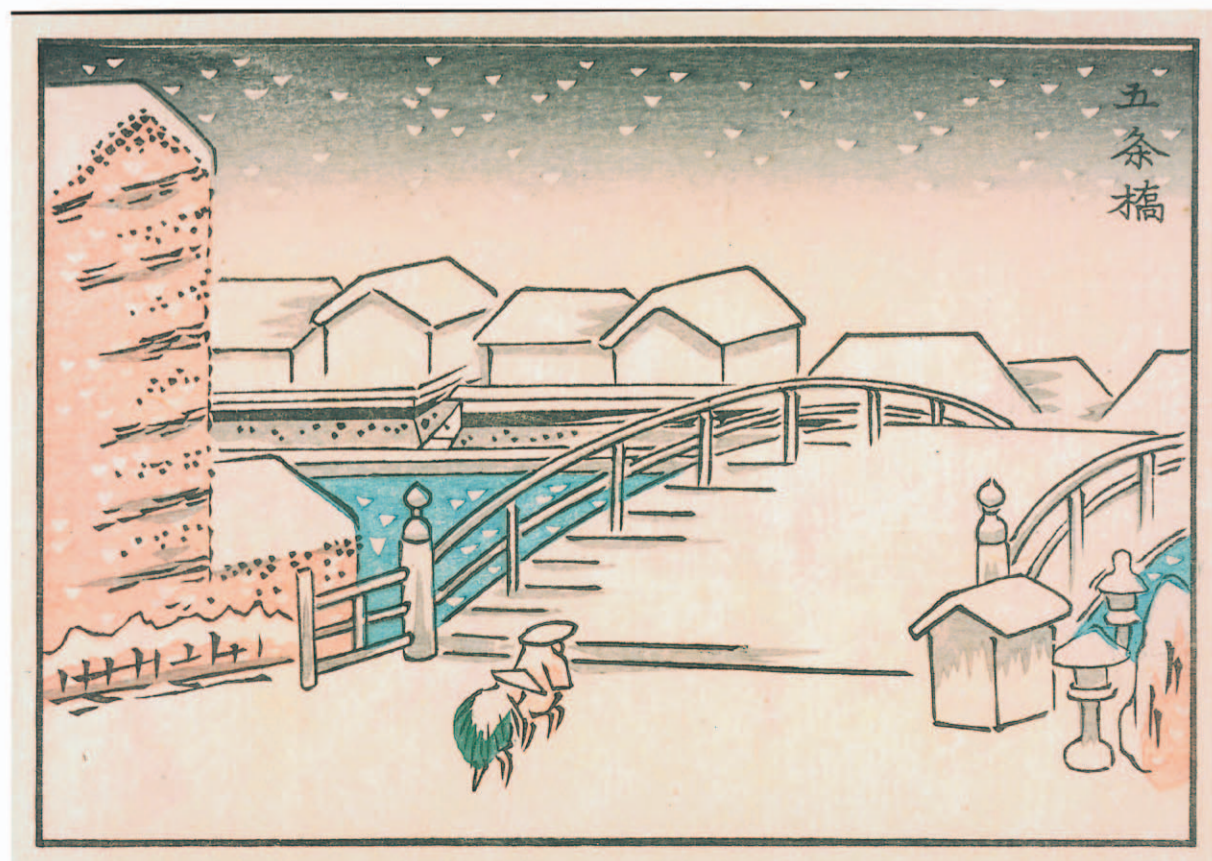
新しくできた名古屋の町では、清須で使われていた同じ町の名前が使われた。京町、桑名町、長島町等だ。堀川に架けられた橋にも、清須の町を流れている五条川に架けられていた橋が取り付けられた。擬宝珠の銘には「五条橋 慶長七年壬寅六月吉日」と刻まれている。そのことから、五条橋が名古屋転地より以前の清須時代のものであることがわかる。

五条橋は明治34年(1901)に改築され、さらに昭和13年(1938)にコンクリート造りの橋となった。この時、擬宝珠は取り外され、名古屋城で保管されることとなった。今、架かっている擬宝珠は模造品である。

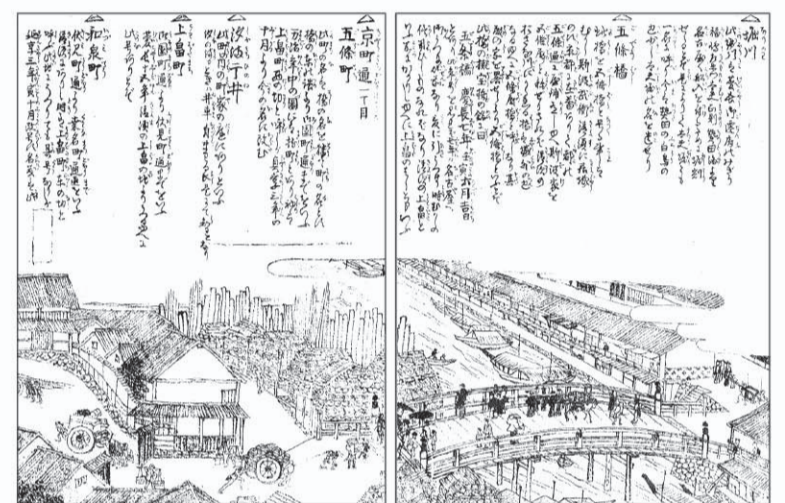
五条橋から中橋まで、江戸時代にタイムスリップしたような一画がある。白壁の土蔵が建ち並ぶしけみち四間道だ。

緑区有松などと共に名古屋市の歴史的町並み保存地区に指定されている四間道は、元禄13年(1700)2月7日の大火によって造り替えられた道である。朝日重章は『鸚鵡籠中記』に、この火事の印象を「猛火虚空に湧き、百千万の雷の如し。予初て如此き火事を見る」と記している。重章は、さらに具体的な数字をあげて、この大火の凄まじさを伝えている。焼失家屋1669軒、神社が3つ、寺が12軒焼失したと記し、書き入れとして「借家は知れず」と書いている。『尾藩世記』によると、この火事で焼失した借家は18,983戸にのぼる。堀川に架かる五条橋、中橋、伝馬橋も炎上した。この大火の経験から、堀川端の道路は四間幅(約7.2メートル)に広げられ、倉庫は厚い土蔵造りに改められた。

四間道を歩いてゆくと川伊藤家の土蔵の白壁が陽光をうけて輝いているのが見える。川伊藤家は慶長19年(1614)に大船町に移住してきた清須越の町人である。茶屋町の松坂屋の伊藤次郎左衛門家に対して、大船町の伊藤家は、川伊藤家と呼ばれている。川伊藤家は、昭和62年に愛知県の文化財に指定された。建物の中央部分には享保7年(1722)に買い取ったもので本家と呼ばれている。



雪の五条橋(名区小景:名古屋博物館蔵)



五条橋(尾張名陽図会:鶴舞中央図書館蔵)



五条橋



四間道